



# 祝福のカンパネラ

-la campanella della benedizione-

## Festa della Agnes

Original Story

ういんどみるOasis

Story

三田堂&ハ木れんたろー

Illustration

なつめえり&白桃&栢餅ふもき

**祝福のカンパネラ**  
 - la campanella della benedizione -  
**Festa della Agnes**  
 Main Character's

# Agnes Boulange

アニエス・ブーランジュ

各地を旅する自称“世界一の人形師”。  
 容姿は若い豊富な経験を持ち、どこ  
 か大人びた印象を与える。

自他共に認める甘いもの好き。また悪  
 戯好きでお調子者だが、空気を読むの  
 が上手く、嫌われるようなマネをする  
 ことはない。

自らで作り上げた白猫型の自動人形タ  
 ングは、自らの意志を持ち人の言葉を  
 理解する、大切なパートナーとして共  
 に過ごしている。



# Miriam

ミリアム

アバディーンの子でクリンメンバー  
 以外で初めてできたミネットの友人。体  
 が弱く、歩行時には杖を突いて歩いてい  
 る。儚げな印象にも見えるが、芯の通っ  
 たところもある少女。兄とアヴリルのこ  
 とを、とても大切に思っている。



# Avril

アヴリル

アバディーンとミリアムに仕えるオート  
 マタ。二人のことを何よりも大切に考え  
 ており、二人を守ることが全てにおいて  
 優先される。その為に、ときに過激な手  
 段を取る事も。  
 魚が好きで、意外と目利きでもある。



## Carina Verritti

カリーナ・ベルリッティ

エルタリアのクラン『Oasis』のオーナーにして、この国の公女。その美貌もあいまって、広く名が知られている。気さくで誰とでも仲良くなれる性格。普段はたおやかな才女の姿勢を崩さないが、よくおろおろしたりしている。

## Minette

ミネット

およそ7年の眠りから目覚めた、人間型のオートマタ（自動人形）。体の構造から精神までどこをとっても人間と変わらない。天真爛漫で好奇心旺盛の元気な天然娘。クランメンバーだけでなく街の人々からも可愛がられている。

## Chelsea Arcot

チェルシー・アーコット

収穫祭で開かれる『アーティファクト展示会』の警備の為やってきた神殿騎士。剣の腕は確かなもので、仲間からも信頼を得ている。丁寧で静かな性格だが、ドジなところがあり、方向音痴でよく街中で迷っている。

## Nina Lindberg

ニナ・リンドベルイ

『Oasis』の事務・家事全般を一手に引き受ける、クランの母親的存在。元々はカリーナの専属メイドとして、ベルリッティ家に仕えており、カリーナのことを第一に考えている。実は人間離れた酒豪。



本編の主人公。  
冒険者クラン『Oasis』に所属  
する冒険者にしてアイテム技師。  
その技術には定評がある。  
優しく穏やかな性格ながら、芯  
に正義感を持ち、『当たり前』の  
ことを『当たり前』にこなすこ  
とができる。天然女殺し。

**Leicester Maycraft**

レスター・メイクラフト



Sub Character's



**Salsa**

サルサ・トルティア

**Tortilla**

リトスの双子の姉であり冒険者  
クラン『トルティアカンパニー』  
副社長。  
明るく元気な性格だが、物事を  
深く考えるのが苦手。



**Ritos**

リトス・トルティア

**Tortilla**

サルサの双子の妹であり、『ト  
ルティアカンパニー』のクール  
な社長。  
失敗の多い姉のサルサをからか  
ってはこっそり楽しんでいる。



**Garnet**

ガーネット

とある事件で知り合った精霊の  
少女。実際はドラゴンの化身。  
強気で偉そうだが愛嬌があり何  
故か憎めない。古代の知識を持  
っている為、意外と博識。



**Shelley**

シェリー

**Maycraft**

メイクラフト

レスターの実の母親。息子を自  
分好みに育てたと豪語するほど  
ノリノリで破天荒なお母様。  
レスターの周りに女の子が大勢  
いることをとても喜んでいる。



**Aberdeen**

アバディー

アニエスの兄弟子に当たる人形  
師で、ミリアムの実兄。  
揺ぎない信念を持ち、あること  
が原因で『Oasis』と対立して  
いたが、今は和解している。



**Nick**

ニック・ラジャック

**La'juck**

レスター達が新米だった頃から  
の仲間で、優しく力持ちな皆の  
兄貴分。しかし強面のせいで色  
々と損をしてしまうことも。  
斧大好きな斧マニア。



## プロローグ

旅装の人々がひっきりなしに往来するエルタリアの駅構内。  
ここには今日も様々な出会いと別れが溢れている。

「嘘……」

冒険者服に身を包んだ少女は驚きの声を上げていた。

彼女の名はアニエス・ブーランジュ。

ここエルタリアを拠点として活躍する冒険者クラン『Oasis』所属の冒険者であり、『世界一』を自称する人形師だ。

「嘘でないことは、ミリアムの様子を見ればわかると思うが」

彼女の前に立つ青年が嘆息しながら答えを返した。

「はあ……。ってことはリトスにまんまと騙されたってわけかあ」

アニエスは一つため息をつくとき、やれやれと肩を竦める。

その隣では、彼女の仲間である自動人形の少女ミニネットが、青年の連れらしい無表情な少女の手を取ってブンブンと振り回していた。

ミニネットは彼女と再会できたのがよほど嬉しいのだろう。体全体で喜びを表現しているのがある。ありと分かる。

そしてそれを見る青年の目もどことなく優しくった。

青年の名前はアバディーン。

かつては克蘭『Oasis』と対立したこともある、アニエスの兄弟子だ。

しかしそれも昨年までのこと。彼らの抱えていたいくつかの問題が『Oasis』との共闘によって解決したことから、すでに和解を果たしていた。そのため以前、アニエスが師匠メトレスの工房に里帰りした際にも、彼は師匠の下で各地のエルを安定させる手伝いをしていたのだ。

ちなみに、その時アニエスがアバディーンたちを収穫祭に誘ってみた結果が、今の状況というわけである。

「リトスさんにはちゃんと到着時刻を教えたつもりだったんですけど……」

アバディーンの妹であるミリアムが申し訳なさそうに謝罪する。

今回、アバディーンがエルタリアを訪れることにした理由のひとつには、エルタリアに定住しているミリアムの様子を窺うかがいに来たというのもあったらしい。

そのためアバディーンたちは、クエストなどで不在になることも多い『Oasis』ではなくミリアムと密に連絡を取り合うようにしていた。

ところが兄の到着時刻を聞き、『Oasis』メンバーに伝えようとしていたミリアムは、その直前、『Oasis』の向かいの克蘭ハウスに住むライバル（克蘭としてもレスターの恋人としても）兼友人、リトス・トルティアの足止めを受け、半ば強引に伝言を引き受けられてしまった。

アニエスたちは、そのリトスに「すでに到着時間が目前であり、ミリアムが一人で出迎えに行っているはず」と教えられ、慌てて駅に向かったのだが……。

「まさかあたしたちの方が早く着いちゃうなんてねえ」

リトスに騙されたアニエスとミネットは、ミリアムの姿を探してさんざん駅構内を歩き回り、最終的に駅の入り口で疲れてへたり込んでいたところで、後からやってきたミリアムとアバディーンに「もしかして、ずっと待っていてくれたんですか」と声をかけられることになったのである。

「ごめんなさい。わたしが最初から『Oasis』にちゃんと行っていればこんなことには……」

「ミリアム様は悪くありません」

ミリアムの言葉を遮る<sup>さへぎ</sup>ように言ったのは、ミネットに腕を振り回されていた少女だった。彼女はミネットの手を払うと、表情も変えずにミリアムを自らの背中に庇<sup>かば</sup>う。

彼女の名前はアヴリル。ミネットと同じくオートマタであり、アバディーンをマスターと仰い<sup>あお</sup>で行動を共にしている少女であった。

「あつ、別にミリアムを責めてるわけじゃないよ!」

アニエスが慌ててフォローするが、アヴリルは警戒を強めたままだ。

アバディーンがこの一年でずいぶんと態度を軟化させたのに比べると、アヴリルはまだまだ一年前から性格が変わっていないようだ。

「結局、誰も困ってなかったですから良かったですよ」



そんな空気を緩和させるように、ミネットがぼわつと微笑んだ。

もともと二人が慌てて駅にやって来たのは、ミネットの親友のミリアムが一人で困っているのではないかと心配したから。ミネットがそう言うのなら、この話題はそれでおしまいだ。

「いやー、ほんとにミネットはいい子だねえ」

「えへへ。褒められたです」

「よかったですね、ミネットさん」

ミネットは、嬉しそうにミリアムと笑いあった。

「それよりもアニエス。ミリアムと駅の中をもつと見てきていいですか？」

「ありや。あんなに歩いたのにまだ見たいんだ」

「ミリアムと一緒に見てみたいのですよ！」

「なるほどね。いいよ、行つといいで」

「ハイです！ 行くですよ、ミリアム」

「ええ！」

二人の少女が手を取り合つて駆け出していく。

「おい、ミネット」。あんまりミリアムを走り回らせちゃダメだよ！」

「ハイです」

ミネットとミリアムは手を握りあつたまま、こちらに大きく腕を振り返していた。ミリアム自身

は能動的というより、ミネットに腕をつかまれたせいで強引に振り回されているような格好だ。だが振りほどいたりしてはいない。病弱だった自分が、今や普通にミネットのハイテンションについていける。そのことが嬉しいのか、楽しそうに笑っているようにさえ見えていた。

アニエスはおもむろにアバディーンを見上げる。

彼は目を細めて去っていく二人を眺めている。

そこには今では懐かしいと思える、とても優しい微笑みが浮かんでいた。

「アバ兄たち、エルタリアはひさしぶりでしょ？」

中央広場に到着したアニエスは、街の景色を誇るように両腕を広げ、その景観をアバディーンたちに見せつけていた。

中央広場を抜けると、もうすぐ冒険者地区。

クラン『Oasis』は冒険者地区の海岸沿いに建てられている。

「あつ。でもアヴリルはときどきミリアムに会いに来てるそうですよ」

「あ、そうなんだ？　じゃあ、ひさしぶりなのはアバ兄だけかな」

アバディーンは短く「そうだな」とだけ答える。その横顔を眺めるアニエスは、昔から変わらな

い兄弟子の愛想のなさに懐かしさを感じて、思わず笑みをこぼしていた。

「アバ兄たちつてさ、もう泊まるとこは決めてるの？」

「何もなければミリアムのところにするつもりだが」

それを聞いて、ミリアムと話しながら少し前を歩いていたミネットが手を上げる。

「それならミリアムと三人で『Oasis』に泊まりにくるといいですよ！　きつとみんなも歓迎するです！」

ねーっと同意を求めるミネットに、アニエスも笑顔で答える。

「そう言ってもらえるのはありがたいが……いいのか？」

「まあ、居候いこうのあたしたちが言うのもなんだけど寝るところ作るだけなら簡単そうだし」

人差し指を立てて得意げに言うアニエスにアバディーンは首を傾げた。

「そうなのか？」

「あー、いや、ほら……レスターの寝室のベッド、去年かなり大きいのに入れ替えたしね。寝るだけならそこに行けばいいだけだしさ。あはは」

アニエスは赤くなつた頬を触りながら嬉しそうに言った。

「……なるほど。そういうことか」

「あつ、別にあたしがレスターの部屋に行くとかそういう話じゃなくてね！」

呆れたようなアバディーンの様子にアニエスは慌てて顔の前で手を振る。

「それならわたしのお部屋を使うといいですよ！」

歩きながら器用に後ろへ向き直り、ミネットが言った。

満面の笑みを浮かべたその顔も、アニエス同様赤らんでいる。

「あ、こら！ 抜け駆けはなしだつてば！ アバ兄、あたしの部屋、貸してあげる！」

ミネットに対抗するアニエスの表情は、真剣さを装ってはいるがどことなく楽しそうでもある。

「……いや。やはり遠慮するでしょう。余計なトラブルを招くことになりかねないようだから」

「そ、そんなことないつてば！」

「それにしても、レスターには四人の恋人がいるとは聞いていたが。まさかおまえがこうまでベタ惚れになってしまふとは……少々意外だ」

「……うー、そればかりはあたし自身も同意見かも」

小さく息を吐いたアニエスは、クスクス笑っているミリウムと珍しく笑顔を見せるアヴリルを見て、照れ隠しのようにそっぽを向いたのだった。

「はや？ あそこで何か配つてるです？」

その時、ミネットが広場の一点を指さした。

なにやら人だかりができています。

中央広場はアニエスにとつても芸を披露するための舞台のひとつ。人だかりそのものはそう珍しくないとはいえ、好奇心が疼かないわけではない。

それはミネットと同じだったらしい。アニエスが視線を向けた時には、彼女はすでに人だかりの中に飛び込んでいた。

「こんなのもらったです！」

戻ってきたミネットの手には一枚のチラシ。

「どうやら収穫祭のイベントに関するものらしい。」

「なるほど。確かに今年は住民たちも気が早いようだ」

「そうだね。実は……『Oasis』でも、喫茶店を出店する予定で、準備してる真っ最中だったりするんだよね」

「ハイです！ しかも水着喫茶なんですよ！」

「みず……ぎ……？」

考え込むアバディーン。アニエスにはどう反応してよいのか悩んでいるらしい真面目な兄弟子の困惑が手に取るように分かるのか、必死に笑いを堪えていた。

「……そうか。がんばれ」

数瞬、押し黙った後、アバディーンは短くそう答えた。

「それとさ、ミス&ミスターコンテストがあるんだよね。そっちもクランごと出場してくれて頼まれちゃってね」

「……そうか」

「そうそう。しかも優勝者は結婚式のモデルになるんだって！ いやー、優勝したらあたしも一躍いちやく

有名人かもね、あははっ」

「アニエスはもう充分有名人ですよっ！」

「あははっ。ありがとっ、ミネット」

さらに上機嫌に言葉を続けるアニエス。

アバディーンはそんなアニエスの顔を眺めながら、再び考え込むような仕草を見せ……静かに呼びかけた。

「アニエス」

「ん？ なに、アバ兄？ あ、ごめん。なんだかさっきからあたしばかり喋しゃべってるね。何か聞きた

いことあった？」

「幸せそうだな」

「ふえっ!？」

兄弟子の穏やかな声音。アニエスは驚いて彼の顔をまじまじと見つめた。

「……そう、見えるかな？」

「ああ、そう見える。……レスターのおかげか」

アニエスは、嬉しさと気恥きぢずかしさが混じり合ったような表情を浮かべ……やがてゆっくりとうつむいた。



「……うん。今、すごく幸せだよ」

「そうか。レスターには感謝しなければならないな」

納得したように頷くアバディーン。そんな兄弟子を見あげ、アニエスは照れたように笑った。

「も、もちろんレスターだけじゃないよ！ カリーナさまだって、チエルさんだって、ニナさんだってニックだってトルティアのふたりだって……そりゃまあ、今日は騙されたけど……あつ、それにね、この国の人たちってみんな親切だし、だからあたしも自然にされてられるっていうか……！」

「はいはいっ！ わたしもアニエスを幸せにしてるんですか!？」

挙手したのはミネットだった。アニエスは大きく頷きうなずを返す。

「うんうん！ もちろんミネットもだよっ！」

アニエスはそう言って中央広場全体をぐるりと眺め回した。

視界の中に、嬉しそうにはしゃぐミネットの、その手に握られたままのチラシの大きな文字が目に入る。

「……そうか。あたしがエルタリアに来てから、もう一年以上経ったんだね」

もうすぐ訪れるのは人生二度目となるエルタリアの収穫祭。

今年の収穫祭では、どれだけ楽しいことが待っているんだろう。

アニエスはそれを考えずにはいらなかった。